

曾根古墳群の記憶

—航空写真に遺されたありし日の古墳たち—

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館）

1. はじめに

糸島地方には60基にのぼる前方後円墳をはじめとして総数1,000基ほどの古墳が分布することで知られている。

全長103mを測る玄界灘沿岸では最大規模を誇る一貴山銚子塚古墳を筆頭に井田原開古墳（92m）、丸隈山古墳（85m）、端山古墳（周溝を含む全長100m）など、北部九州では大型に属する4～5世紀の前方後円墳が集中し、また、今宿平野を望む南の丘陵地帯には500基近い後期群集墳が集中するなど、古墳時代全般を通じて多くの古墳が築造された。

さらに、4世紀後半には鋤崎古墳で横穴式の埋葬施設が導入されるなど大陸の文化要素をいち早く受容する先進性も垣間見せるなど、古墳研究上の重要古墳が多く残された地域である。

さて、今回紹介する曾根古墳群は、糸島地方の平野のなかで最も広い怡土平野の中央部に立地する古墳群である。雷山（標高951m）の裾から総延長4kmにわたって北に延びている曾根丘陵（第1図）上にある。広大な面積を有する丘陵であるが、天然の水利に乏しかったことなどに起因して、有史以来、集落など人々の主たる生活の場として利用される機会は極めて少なかった。

しかし、戦後に、農家の新規入植が奨励されたことにより、畑の開墾など徐々に開発の手が加えられるようになった。昭和40年を迎えると、民間主導の宅地造成が急ピッチで進められたことが開発に拍車をかけ、原野→農地→住宅地へと劇的な変化を遂げることとなった。これとともに当地に所在した埋蔵文化財にも少なからず影響が及ぶこととなった。

1979（昭和54）年には、前原町に文化財の専門職員が配置されたのを契機として、その保護に積極的に取り組むこととなる。ほどなく、1982（昭和57）年には丘陵の北端にある平原遺跡および曾根古墳群が、弥生～古墳時代にかけての当地の拠点集落であった三雲・井原遺跡との不可分の

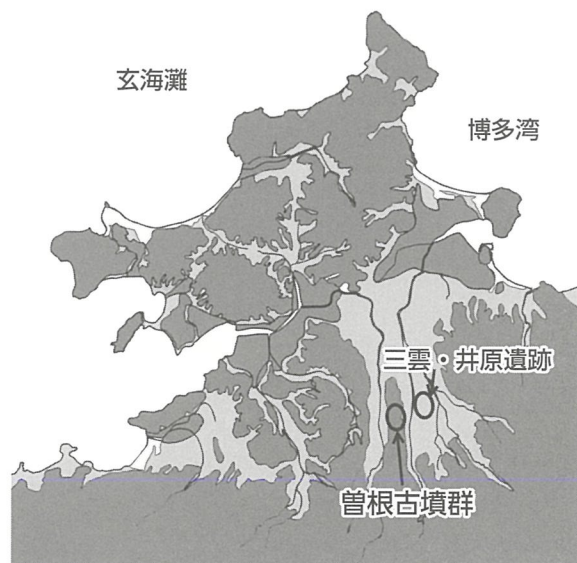
首長墓群として評価され、伊都国の興亡を知る上で貴重な文化財群として「曾根遺跡群」と総称され国史跡に指定された。

しかし、残念ながら、すでにこの時点で先山古墳や高上大塚古墳など貴重な古墳が、調査が行われることなく破壊の憂き目に会い、幻の古墳と化していた。

さて、時は移り、平成22年に福岡県教育委員会が保管していた図面や写真など糸島市域の文化財調査の記録類が大量に返還され、博物館がその受け入れの窓口となった。

博物館では、写真記録をデジタル保存するなど整理を進めたが、その中から1960（昭和40）年に行われた平原遺跡発掘調査の航空写真が発見された。（写真11）平原遺跡の発掘調査当時の周辺の地理的環境や調査の様子を伝える貴重な資料である。それとともに曾根丘陵上の古墳群を撮影した写真も撮影されており、消滅した先山古墳や高上大塚古墳とみられる写真も含まれていた。

そこで、ありし日の曾根古墳群の航空写真を紹介するとともに、狐塚、銭瓶塚、ワレ塚、各古墳のこれまでの調査の成果を概観する。また、消失



第1図 曾根古墳群の位置

した先山、高山大塚古墳に関する情報もまとめ、最後に曾根古墳群の現状における歴史的評価について触れてみたい。

2. 曾根古墳群の調査の足跡

さて、曾根丘陵上の古墳については、古くは江戸時代に記された記録が残されており、その後、たびたび地誌などでも紹介されている。

また、1980年代以後は、古墳の保護や整備に向けての事前調査が行われ、各古墳の詳細が徐々に明らかになってきている。

そこで、まずはじめに、過去の記録や調査成果を紹介し、続いて個々の古墳の調査成果と航空写真の比較検証を行い、あわせて先山古墳と高山大塚古墳について資料の整理を行いたい。

(1) 『筑前国續風土記附録』

曾根古墳群に関する最も古い記録としては、加藤一純・鷹取周成が著わした標記の書（註①）がある。文政年間にまとめられたとされており、「井

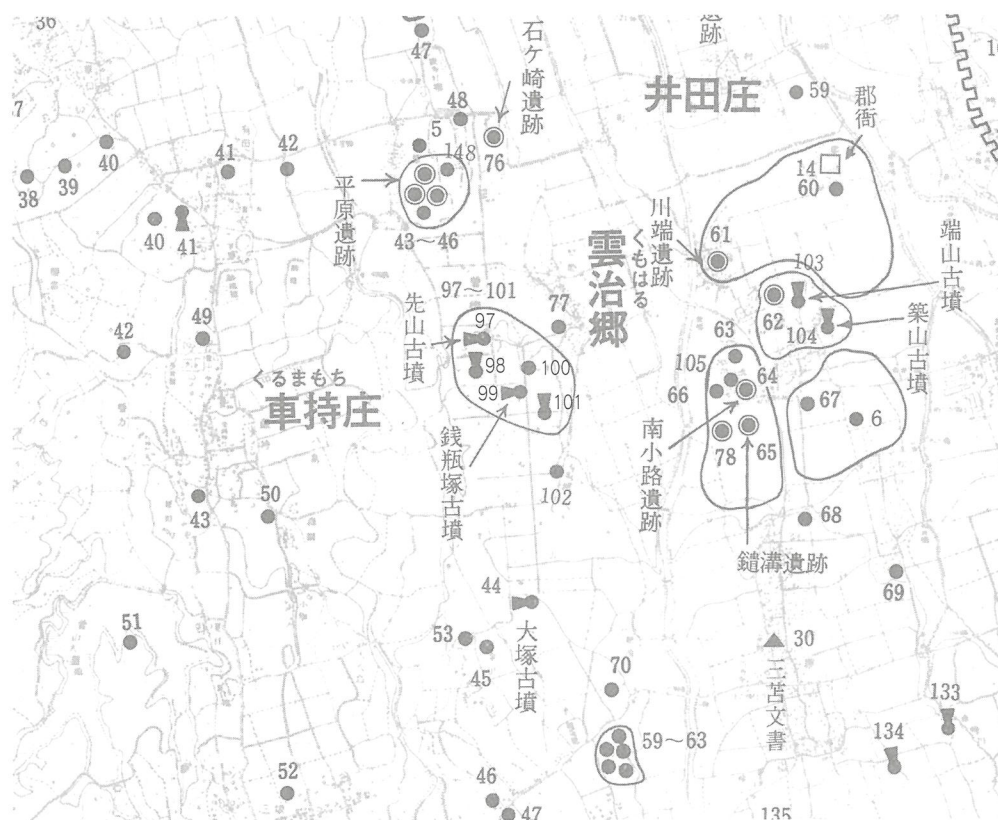
原村—曾根原古戦場—」の中に、以下のとおり曾根古墳群の記録がみられる。

「原の（野か？）に十三塚とて小さき塚南北に相並へり。其内平地に名残れるもあり、其外にも穴塚鬼塚ともいふ。十二三、三雲村に境へる所にあり。口は南に向う。其内鐘撞塚とて穴のなき塚あり。狐塚、ツルベ塚、ゼニガメ塚といふもあり」

当時は、曾根丘陵上に十数基の「塚」が残っていたことが記されており、狐塚、ゼニガメ塚など現存する古墳の名がみえる一方、鐘撞塚、ツルベ塚など今は確認することができない塚の名もみられる。

「十三塚」の存在が記されていることから、十三仏信仰に基づく盛土遺構なども存在した可能性があるが、現在、それと認識できる遺構は残っていない。ただし、大正4年の地籍図では、井原、蔵持地区と境を接する曾根地区の南西隅に「十三塚」の小字を確認することができた。

また、同地籍図には、狐塚古墳の南側に「念佛塚」の小字も認められるが、詳細は不明である。



第2図 前原町文化財地図（前原町文化財地名表付図）に加筆（1/25,000）
97は先山古墳、98はワレ塚（曾根2号）古墳、99は銭瓶塚古墳、100は曾根4号墳、101は狐塚（曾根5号）古墳

(2)『一貴山銚子塚古墳』

1952（昭和27）年に刊行された一貴山銚子塚古墳の発掘調査報告書（註②）には、森貞次郎が実施した現地踏査の成果として、糸島地方の16基（怡土村8基・周船寺村4基・一貴山村2基・前原町2基）の前方後円墳の分布状況が報告されている。

個々の古墳名は明示されていないが、地図に示された位置関係から曽根古墳群では、ワレ塚、銭瓶塚、狐塚、高上大塚古墳が表示されたものと考えられる。

なお、森は狐塚古墳を前方後円墳（帆立貝形前方後円墳）と推定したが、後年の発掘調査において円墳であることが確認されている。

(3)『前原町文化財地名表』

1973（昭和48）年に前原町教育委員会が発行（原田大六監修）した文化財の分布地図（註③・第2図）では、前原町内に15基の前方後円墳が表示されている。曽根古墳群については、先山、曽根2号（ワレ塚）、銭瓶塚、曽根4号（円墳）、

曽根5号（狐塚）、曽根6号（円墳）、高上大塚等が表示されているが、先山古墳と高上大塚古墳には「壊滅」と但し書きがあり、地図が作成された時点ではすでに消失していたことがわかる。

この一連の分布調査の成果には、糸島高校歴史部の踏査の成果もふんだんに盛り込まれており、同時期に刊行された『糸高文林』第12号には、当時高校生として活動に参加した日高光子、水崎しのぶ氏によって曽根2号墳（ワレ塚古墳）出土の円筒埴輪が紹介され（註④）、現在も糸島高校郷土博物館で見ることができる。

(4)『三雲遺跡Ⅲ』

1982（昭和57）年に刊行された『三雲遺跡Ⅲ』（註⑤）において、柳田康雄氏は、端山、築山古墳の発掘調査成果の報告文の前段に「糸島の古墳文化」の項を設け、糸島地方における河川水系、平野などを単位とする古墳の分布と変遷について詳説した。この報告によって糸島地方の前方後円墳の数は飛躍的に増加した。

柳田氏は、ワレ塚、銭瓶塚、狐塚古墳を5世紀

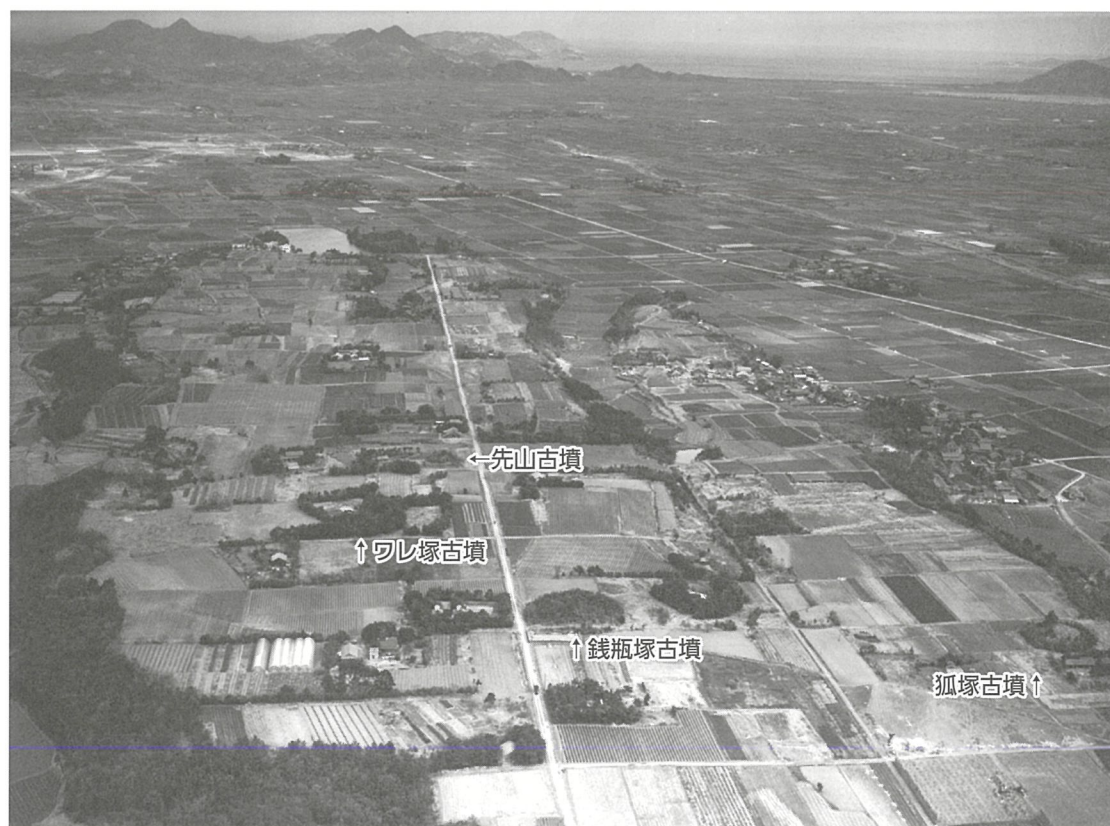


写真1 曽根丘陵の俯瞰（南から）

前半～中頃、高上大塚古墳を5世紀後半の築造と推定し、4世紀代に築造された端山、築山古墳に後続する怡土平野の首長墓群と位置づけた。この首長墳の変遷は現在でも大筋で支持されている。

3. 曾根古墳群の航空写真と調査の成果

(1) 昭和40年の曾根丘陵の風景

さて、福岡県教育委員会が昭和40年に平原遺跡の調査風景などを撮影した航空写真は合わせて24枚あるが、そのうち、曾根古墳群に関連する写真は16枚である。

写真1は、古墳が集中する曾根丘陵の中央部を南西方向から俯瞰した写真である。丘陵上には畑地が広がり、農家の屋敷とこれを取り囲む防風林が点在する。丘陵を縦断している直線道路は現在の市道曾根一山北線である。

ちなみに、左後方には糸島半島の山岳地帯、写

真中央には糸島平野ののどかな田畑風景、その右背後に見える海は博多湾である。

曾根古墳群に目を移すと、右手前に狐塚古墳、中ほどに銭瓶塚古墳、その左背後にワレ塚古墳、さらにその後方に先山古墳の姿を確認することができる。

狐塚、銭瓶塚、ワレ塚古墳については、昭和56年以後、たびたび発掘調査が行われ、古墳に関する情報の充実度が増してきた。

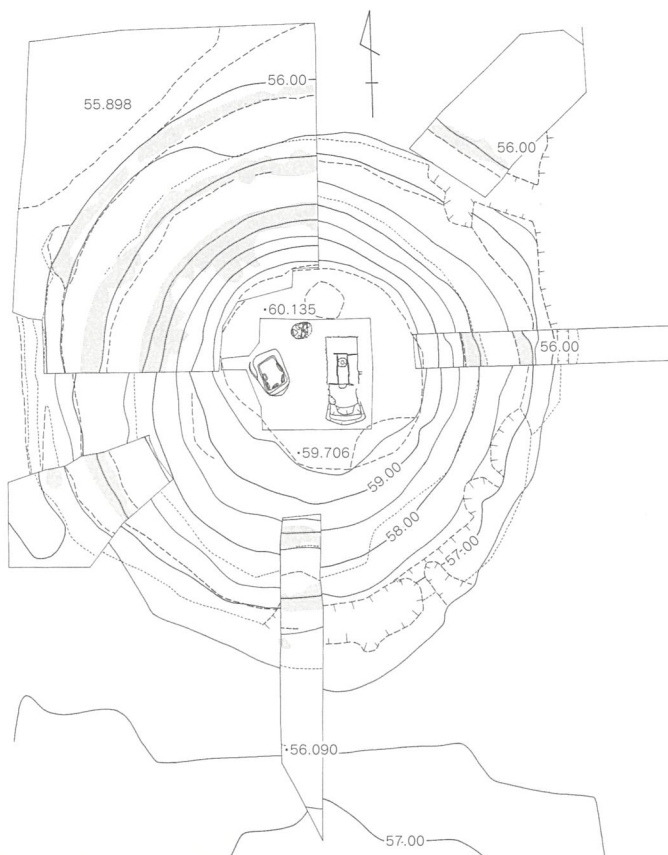
(2) 狐塚古墳

写真2は、狐塚古墳を真上から写した写真である。この写真では、墳丘の南と北側に周溝の痕跡が窪地として残存していたことが確認できる。

しかし、墳丘の西裾（写真の墳丘左裾）では、雑木林がやや西向きに張り出していて、平面形は帆立貝形前方後円墳のようにもみえる。このこと



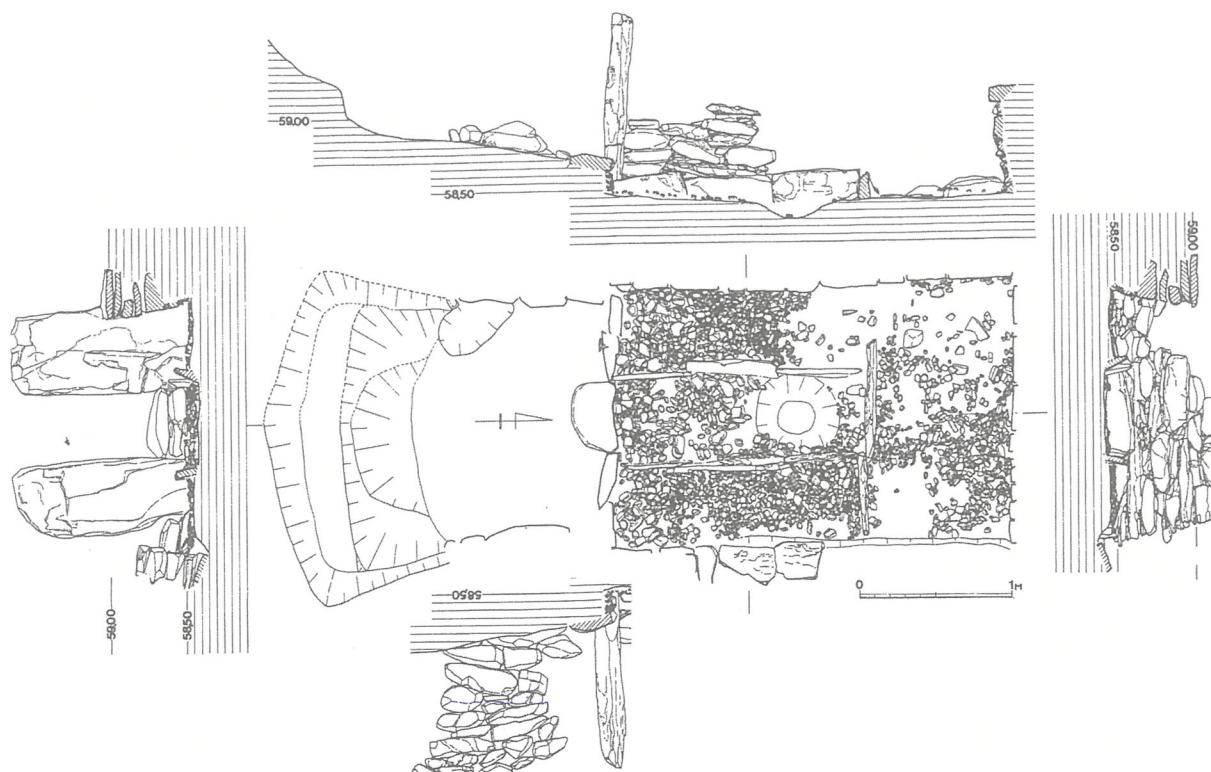
写真2 狐塚古墳（直上から・1965年撮影）



墓石検出状況（北東から）



第1主体部 横穴式石室



第3図 狐塚古墳墳丘図（上・1/400）・石室実測図（下・1/50）

が、当古墳を長く前方後円墳と誤認する要因となったと考えられる。

1981（昭和56）年には、前原町教育委員会による確認調査が実施され、直径32m、高さ3.8m、周囲に幅5mほどの周溝がめぐる大型円墳であることが確認された（註⑥）。墳丘は3段築盛で各段の斜面に葺かれた葺石も確認されている。

これまで、主体部の位置が明示された墳丘図は公表されていなかったため。改めて墳丘図に主体部平面図を加えたのが第3図である。

墳頂部には南に開口する古式の横穴式石室と竪穴式小石室が並んで構築されていた。竪穴式石室は石材が完全に抜き取られていて残っておらず、詳細は不明である。横穴式石室も天井石は抜き取られ周壁も大きく損壊していたが、幸い下半部と袖部が残存しており、割石を小口積みした長さ3.2m、幅1.7mの石室であることが確認できた。石室と外部は墳頂から斜め下方に向かうスロープ状の墓道でつながり、石室の袖には長方形の板石を両脇に立てて袖部を仕切る。玄室と羨道の間に段差があるのが特徴である。

石室の床面には結晶片岩の板石を「コ」の字形組んで3区に仕切った屍床が組まれていた。

当該地方の石室としては、丸隈山古墳、釜塚古墳と同一系譜上に位置づけられる石室であるが、前二者と比較すると、周壁の板石材が厚みを増し、石積みやや粗いところが前二者よりも後出的な要素と捉えられ、5世紀第2四半期頃の築造と考えている。また、石室の規模が一回り小型であることは前二者との間に階層的な格差があったものと考えられる。

(3) 銭瓶塚古墳

①古墳の概況

狐塚古墳の西100mに位置する前方後円墳である。航空写真撮影時には、すでに前方部はクビレ部付近で道路によって分断され、前方端部も宅地造成などによって破壊が進んでいる様子が見える。さらに東西方向に開削された道路も墳丘の南裾付近を削り寸断している状況を確認できる。

道路に削られた後円部の南東裾部は1985（昭和60）年に行った発掘調査によって周溝を確認

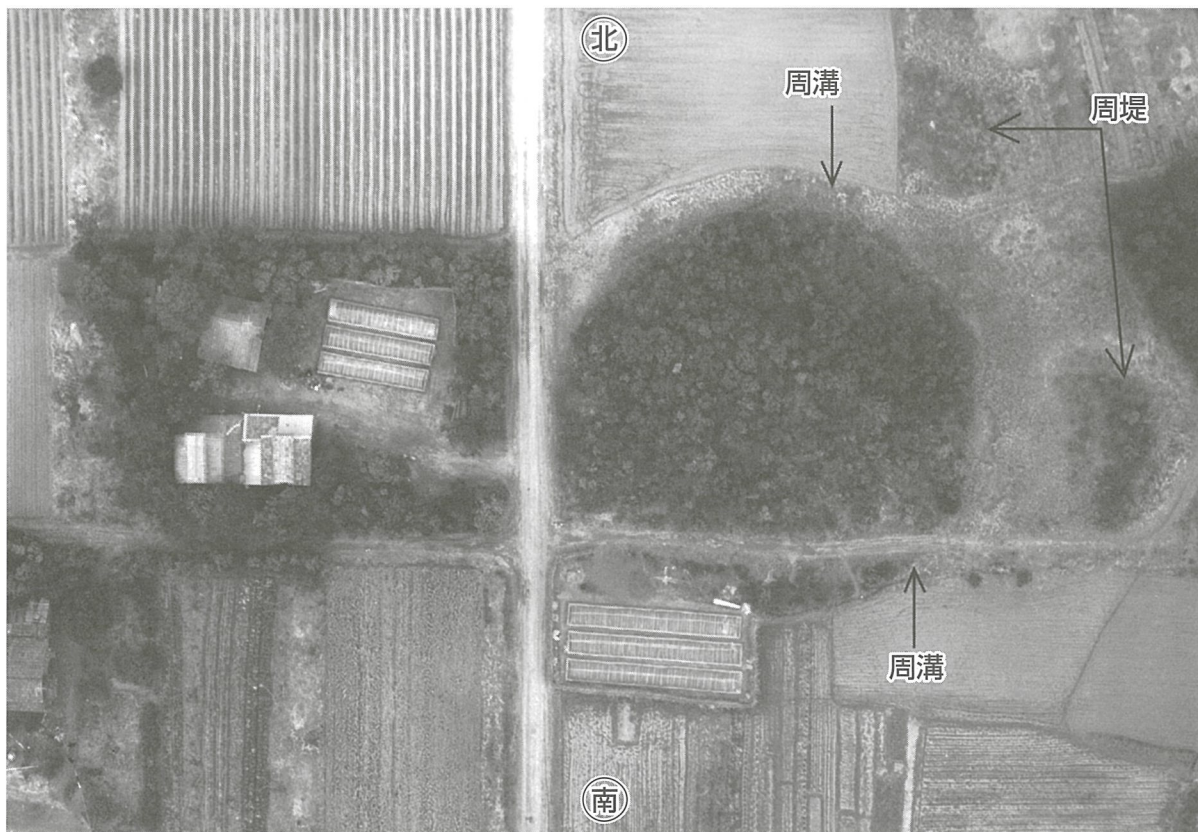
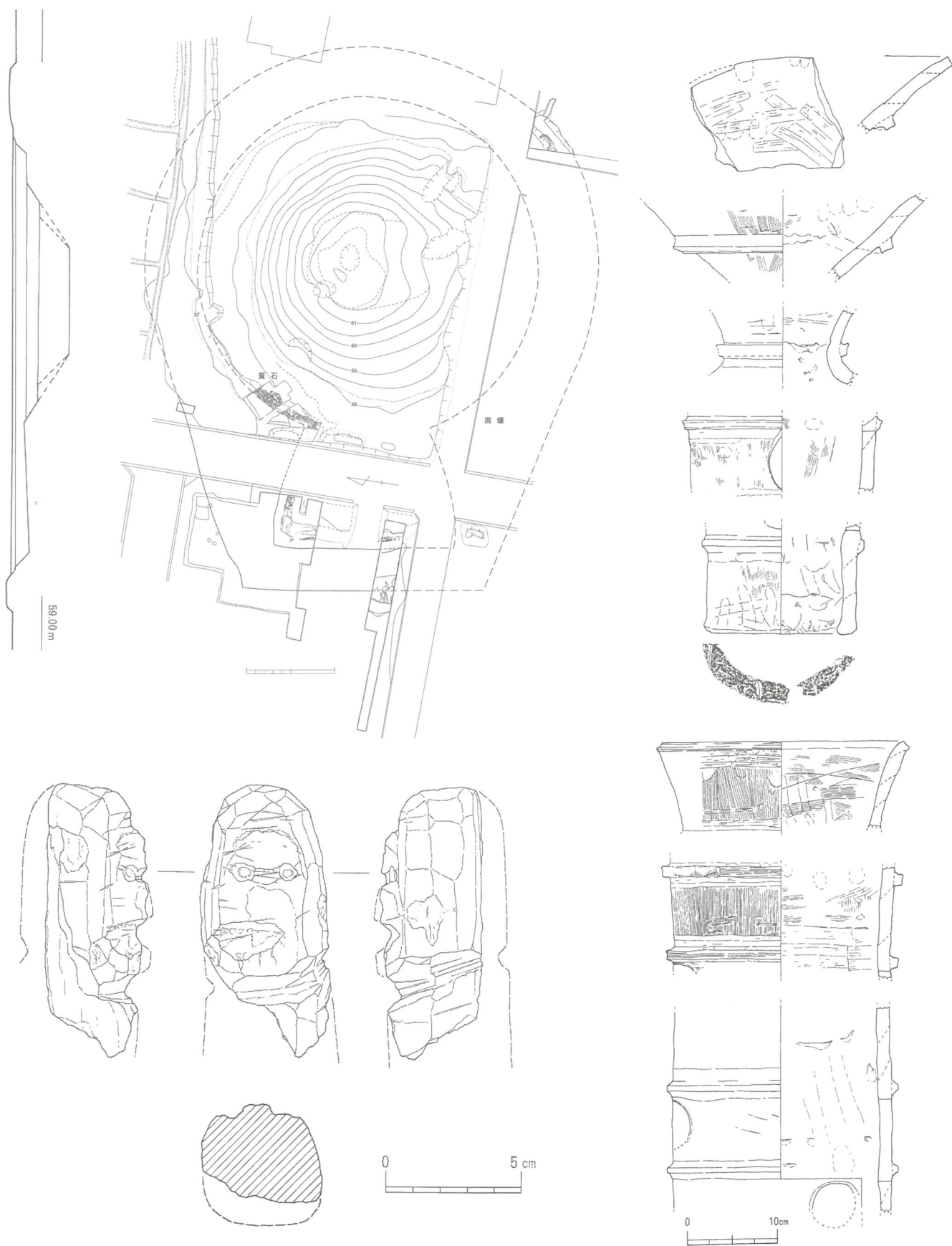


写真3 銭瓶塚古墳（直上から・1965年撮影）



第4図 銭瓶塚古墳墳丘 (1/600)・埴輪 (1/6)・岩偶実測図 (1/2)

することができた（註⑦）。

墳丘の周囲に目を移すと、後円部の北側には、墳丘裾と畑の間を同心円状にめぐる空隙地を見ることができ、これが周溝の痕跡であることを容易に推測できる。周溝の痕跡は後円部東裾付近では、地表面の土色の違いとして追認することができる。

さらに、後円部周溝の東と北東の外縁には周溝を囲むように雑木が茂っていて、周囲よりも若干高くなっていたようである。現状では確認することはできないが、ここに周堤が残存していた可能性がある。将来、詳細な調査を行う際には十分に注意を払う必要があるだろう。

古墳の発掘調査は1981（昭和56）年（註⑧）以後、断続的に4回実施され、主軸方位をN－80°－Wに向け、墳丘全長48.3m、後円部径36m、周溝を含めた全長62.1mの帆立貝型前方後円墳であることが確認された。とりわけ2003（平成15）年度に実施した調査では、左クビレ部～前方部にかけての墳丘の形状を、周溝とともに詳細に確認することができた。

この調査に併せて、墳丘左クビレ部の調査も行い（写真4）、後円部1段目のテラスで円筒埴輪や朝顔形埴輪が原位置を保った状態で残っていることを確認した（註⑨）。また、前方部の周溝内から人物（動物）形埴輪、盾形埴輪など形象埴輪片が出土しており、前方部にも形象埴輪が立てられていたと考えられる（註⑨に同じ）。

これとは別に後円部頂上では1947（昭和22）年に原田大六らによって切妻屋根の家形埴輪が掘り出され、その後、しばらく糸島高校郷土博物館で

保管されていたようである（註⑩）。

さらに、左クビレ部の周溝埋土からは、残存高10.3cmの結晶片岩製の岩偶が出土した。男性像とみられ、目を丸く見開き、歯を剥き出した威嚇の表情を見せることから、古墳の守護を意図した石像とみられ、石人との関連も指摘されている。

なお、埋葬施設については調査を行っていないため不明である。

築造年代については、決め手となる土器等の出土がなく埋葬施設も明らかではないが、出土埴輪が無黒斑で、外形は小型化しタガが扁平化しているものが見受けられる。円筒部が直立し近在のワレ塚古墳出土の埴輪には先行する形態とみられ、5世紀後半の築造と推定される。

②糸島地方の埴輪

ところで、糸島地方において埴輪が出土した古墳は、曽根古墳群の銭瓶塚、ワレ塚両古墳を含め旧怡土郡域で10基、旧志摩郡域で3基の計13基に上る。埴輪が出土した古墳の数は、前方後円墳の分布数とともに周辺地域より突出して多く、高い密集度を示しており、当該地方の古墳文化の特色の一つである。

また、九州における埴輪の本格導入期の指標資料と位置づけられる鋤崎古墳を皮切りに、6世紀前半の今宿大塚古墳にいたるまで、継続して製作されているのも特徴であり、その概略について少し触れておきたい。

当該地方の埴輪の変遷を古墳の築造時期をもとにまとめたのが第5図である。報告されている埴輪は、発掘調査によるものばかりではないので、各古墳における出土傾向を細かく比較検証するこ



写真4 銭瓶塚古墳クビレ部葺石検出状況（南から）



写真5 クビレ部の円筒埴輪列（東から）

とはできないが、あらましを把握することは可能である。

分布の時間的な変遷をみると、元岡池ノ浦、鋤崎、丸隈山古墳など初期の埴輪が出土した古墳は糸島地方東側の今宿湾岸に集中する。その後、旧怡土郡では、周船寺、曾根古墳群の前方後円墳に継続して埴輪が用いられるのに対し、旧志摩郡域では、井田原開、経塚古墳で使用されるにとどまっており、対照的な分布状態を示している。

器種や製作技法の変遷をみると、当該地方で最初に埴輪が採用されたのは三雲築山古墳で、壺形埴輪が出土したのが初例となる。円筒埴輪も出土しているが小片にとどまっていた詳細は不明である。今後の調査による解明に期待がかかる。

なお、近隣の三雲郡の後古墳では、周溝から大型の二重口縁壺が出土しており、壺形仮器の先行供献例として図示している。

円筒埴輪が本格的に導入されたのは、元岡池ノ浦、鋤崎古墳である。両古墳の埴輪とも薄手で丁寧に仕上げているところが共通している。元岡池ノ上古墳では、三角形透かし孔を有する円筒埴輪と、壺形埴輪の一部が確認されている。

墳丘、主体部の本格的な調査が行われた鋤崎古墳では円筒形、朝顔形埴輪列が墳丘に4段に廻ることが確認され、用いられた総数は400本以上に上ると推定されている。

また、壺形、盾形、靴形、短甲形、圀形、家形埴輪など形象埴輪も多く出土し、その配置を含め、機内地域からの強い影響を感じさせる。

鋤崎古墳で本格化した円筒形・朝顔形埴輪の大量使用は、その後に続く当該地方の首長墳にも継承された。鱗付埴輪(井田原開古墳のみ出土)、三角形や半円形の透かし孔、最下段の透かし孔などの埴輪を構成する諸要素が、井田原開、丸隈山、釜塚古墳など後続する首長墳で確認されることもそれを裏付けている。

製作技法について、釜塚古墳までは有黒斑埴輪で、野焼き焼成と考えられるが、兜塚古墳以後は無黒斑埴輪へと変わっており、窖窯焼成が導入されたと考えられる。横畠古墳は有黒斑ではあるものの、黄褐色を呈していることから焼成温度の高さをうかがわせ、最下段のタガが消失している点など、窖窯導入に向けての過渡的な様相を垣間見ることができる。

糸島地方の埴輪は、時期を問わず外面の調整はタテハケによる一次調整のみで終えるものが一般的で、ヨコハケを施すものはほとんど見られないが、無黒斑埴輪が出土している経塚、銭瓶塚古墳では、ヨコハケを施したものが認められることから、窖窯焼成技術とともに伝播したと考えられる。しかし、ヨコハケ技法は、以後、当該地方で定着することではなく、後続するワレ塚古墳や今宿大塚古墳の外面調整はタテハケの1次調整のみで終える。

九州地方の埴輪の研究は、高橋徹らにより精力的に進められてきた。高橋氏の編年(高橋徹「九州の埴輪について『九州の埴輪その変遷と地域性』2000年九州前方後円墳研究会編)に従えば、銭瓶塚はⅣ期(5世紀後半)、ワレ塚古墳はⅤ期(6世紀前半)に位置づけられると考える。この時期の糸島地方は、周辺地域と比較して前方後円墳の築造数が一時的に減少し、また、墳丘規模も小型化する時期であり、当該地方の政治的地位が大きな変革期を迎えたものと考えられ、当該期の歴史を検証する上で、両古墳は重要な意味を持つ。

(4) ワレ塚古墳

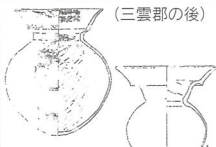
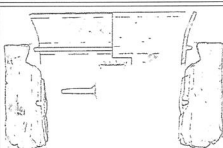
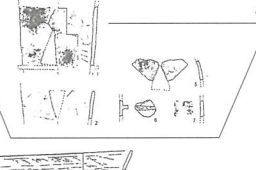
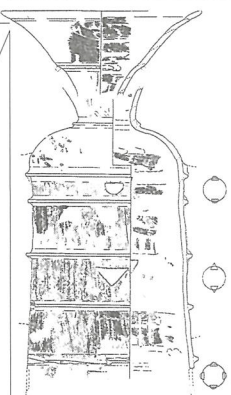
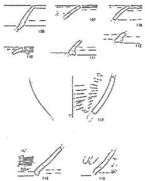
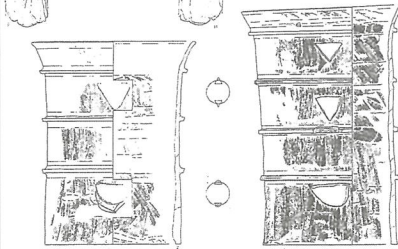
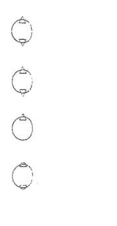
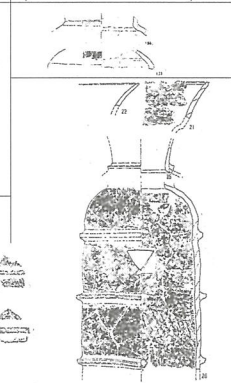
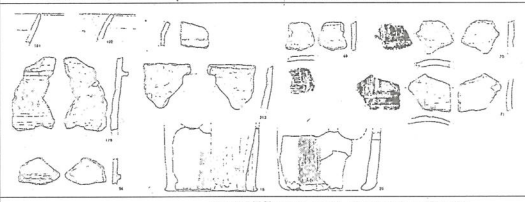
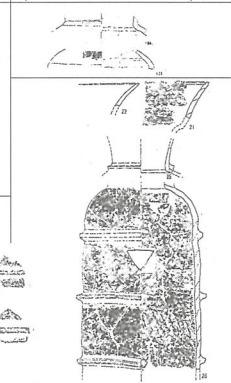
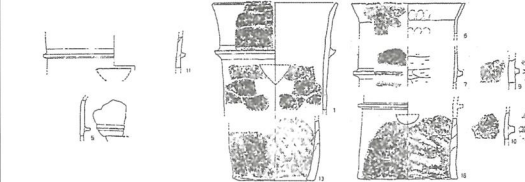
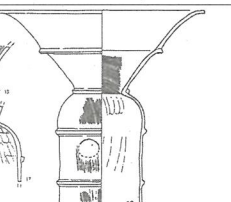
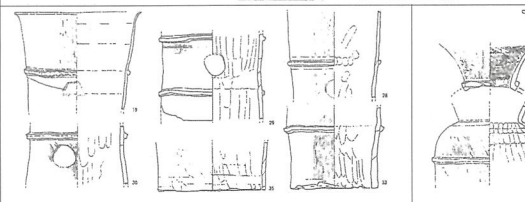
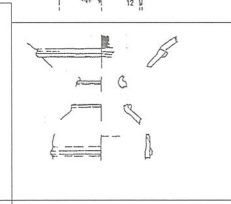
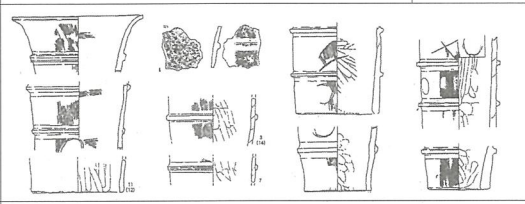
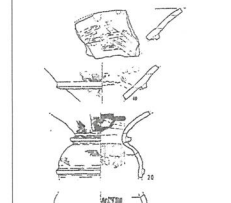
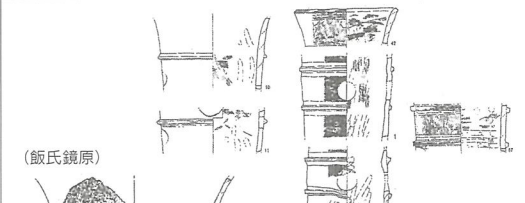
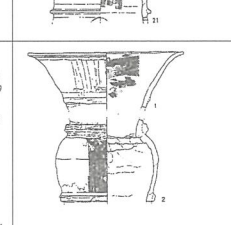
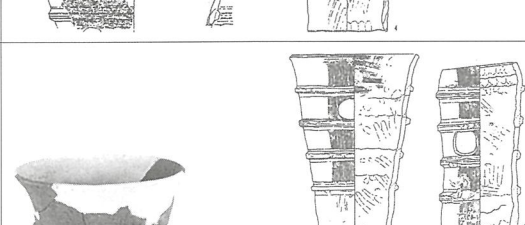
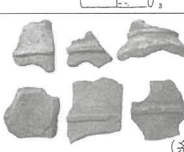
今回発見された一連の航空写真には、ワレ塚古墳を単体で近景撮影されたものが1枚ある。しかし、鬱蒼とした屋敷林で覆われていたため、古墳の形状を写真から読みとることはできない。

昭和56年度に現況の測量調査が行われ、ここではじめて前方後円墳であることが確認されたが、前方部が細く開きがほとんどない特異な平面形を呈していた。この古墳の詳細が明らかとなったのは、2005～2006(平成17)年度に行われた確認調査である(註⑩)。

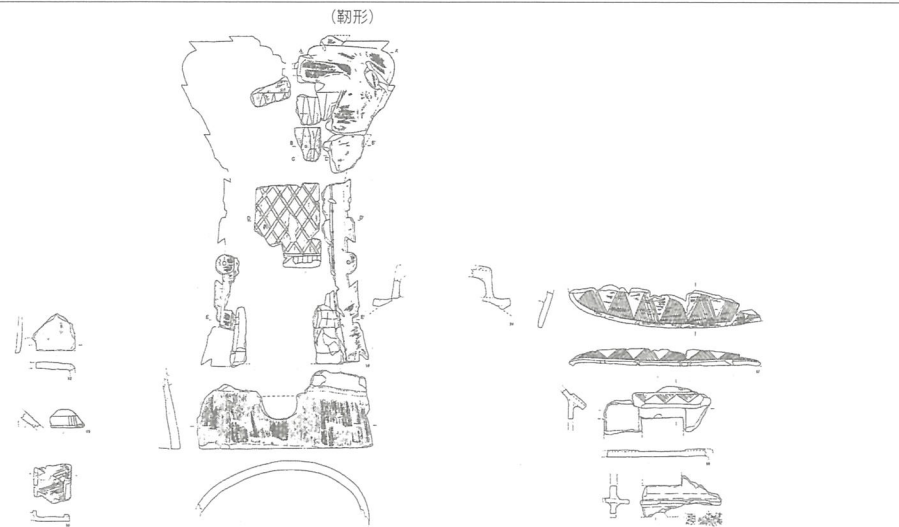
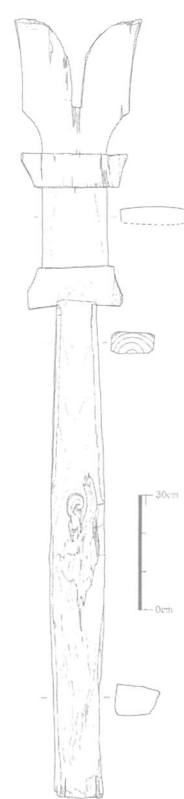
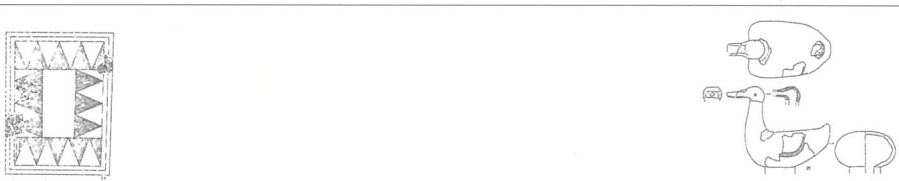
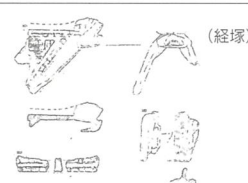
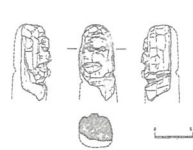
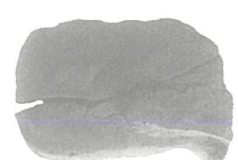
この調査の結果、墳丘全長42m、後円部径30m、前方部長12mの前方後円墳であることが判明した。前方部は著しく締まったクビレ部から扇状に大きく広がっている。

墳丘は南から北に向かって緩やかに下る勾配地に墳丘基底部を水平にして築かれているため、墳丘をめぐる周溝の深さは後円部前面では1.2mほどであるが、前方部側に向かって徐々に浅くなり、前方部前面では消失し、まさに馬蹄形を呈する。前方部では2段の葺石が確認されている。

墳丘には前方部からクビレ部にかけて円筒埴輪が密に配されている(写真⑤)が、後円部での配

古墳名	築造時期	黒斑の有無	透孔形状	透形埴輪	円筒埴輪・朝顔形埴輪		
三雲築山	3期	有黒斑		(三雲郡の後) 			
元岡池ノ浦	4期		三角形				
鋤崎			半円形 三角形				
井田原開			(半)円形 三角形				
丸隈山	5期		円形 半円形 三角形				
神在横畠			6期	円形 台形			
兎塚	7期		無黒斑	円形のみ			
銭瓶塚	8期						
ワレ塚	9期						
今宿大塚		  (糸島高校所蔵品)					

第5図 糸島地方出土埴輪変遷図 (1/20・写真は縮尺不同)

輪 埴 象 形			資 料 連 関
盾形	家形	動物・人物・他	
(靱形) 			 (釜塚)
			
			
 (釜塚)			
 (経塚)			
 			
			

※各古墳報告書等から転載

置状況については調査が不十分で詳細は明らかではない。

しかし、後円部に入れたトレンチでは、埴輪の出土量が極端に少なく、本来、埴輪が前方部を中心に配されていた可能性もある。

前方部墳丘上では、円筒埴輪がコの字状に密に配されていた（第6図）。また須恵器坏、坏蓋、甕、高坏、器台など多く出土し、それらが破損して墳丘斜面や裾部に転落した状況がうかがえ、また、馬形埴輪や人物埴輪片なども出土していることから、前方部において、埴輪を用いた祭祀が行われていたものと考えられる。円筒埴輪の中には上端が内湾して収束した異形のものもある。韓国光州広域市の月桂洞2号墳の埴輪形土製品との類似性

が指摘されており（註⑫）、その関連が注目される。

後円部では、頂上から南にかけて大きな盗掘・陥没坑があり、おそらく横穴式石室の石材が抜かれて大破したのと考えられ石室が、主軸方位に平行して南側に開口していた可能性が高い。

古墳の築造時期について、墳丘上から出土した須恵器（第6図）のうち、坏のなかにMT15型式のものが認められること、埴輪が無黒斑であることを考慮して、6世紀初頭の築造と推定している。

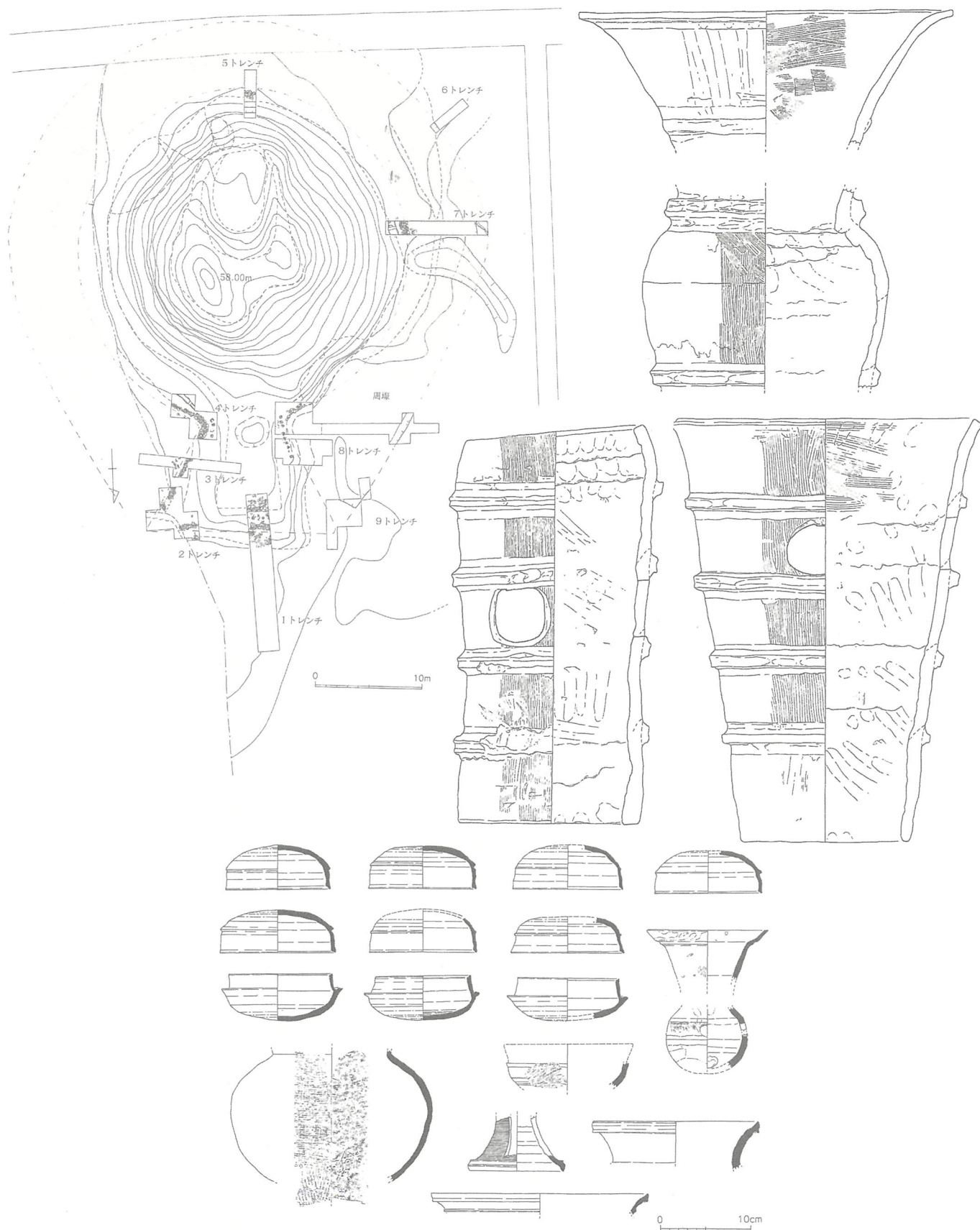
(5) 先山古墳

①立地

先山古墳は、ワレ塚古墳の北100mに位置していた前方後円墳で、現存する曾根古墳群の最北端



写真6 ワレ塚古墳発掘調査時全景（真上から・2005年撮影）



第6図 ワレ塚古墳墳丘 (1/500)・埴輪 (1/6)・須恵器 (1/6) 実測図

にあたる。この古墳から北に向かって丘陵の勾配が急にきつくなり、傾斜地となっているので、首長墳の築造環境としてはあまり適した立地とはいえず、この北には他に古墳があったという情報もないことから、この古墳が、曾根古墳群の最北端に位置していたと考えてよい。

②遺存状況と墳形の復元

写真7は、垂直写真を拡大したものである。一見ただけで前方後円墳であることがわかる。撮影が行われた1965（昭和40）年当時は、まだ、墳丘が比較的良好に残存していたことがうかがえる。

古墳の東に延びるやや幅広の道路（R1：現市道曾根一山北線）は、南北に新設された公道であり、その法線は現在とほとんど変わっていない。これを基準に墳丘の主軸方位を測ってみると概ねN-58°-Eに向けられていたことがわかる。

R1道路から西に派生する道路（R2：現市道曾根中27号線）が墳丘裾を削った断面の状況を俯瞰写真（写真2）を拡大して観察したところ、墳丘2段目の法面の勾配は緩やかにみえる。道路が交差点から西に向かってなだらかに隆起している状況が確認できる。また、前方部は後円部一段目テラス面と同じ高さで低平のまま墳端部まで伸びていたようである。墳丘の裾は後円部ではP1～4を通る円形、前方部はP4～8を通る台形のプランを想定した。一方、「地名表」には、先山古墳に「周湟」が存在したことが記録されている。この写真では、土地の子細な起伏まで読みとることはできないが、想像たくましくして墳形の復元を試みたのが第7図である。

前方部の北西角の北側に土地区画線と明らかに方向を異にし、直角に曲がるコーナーを有した植栽帯が観察できる（第7図1）。再び写真2で確認



写真7 先山古墳（真上から・1965年撮影）

してみると、この植栽帯は建物1の背後に土塁状の高まりとして写し出されており、あたかも建物がこれを風除けとして利用していたように見える。他にも古墳の周囲に点々と高まりが残っており（第7図2、3、4）、これらを繋ぎ合わせると馬蹄形にめぐる周堤を復元することができる。

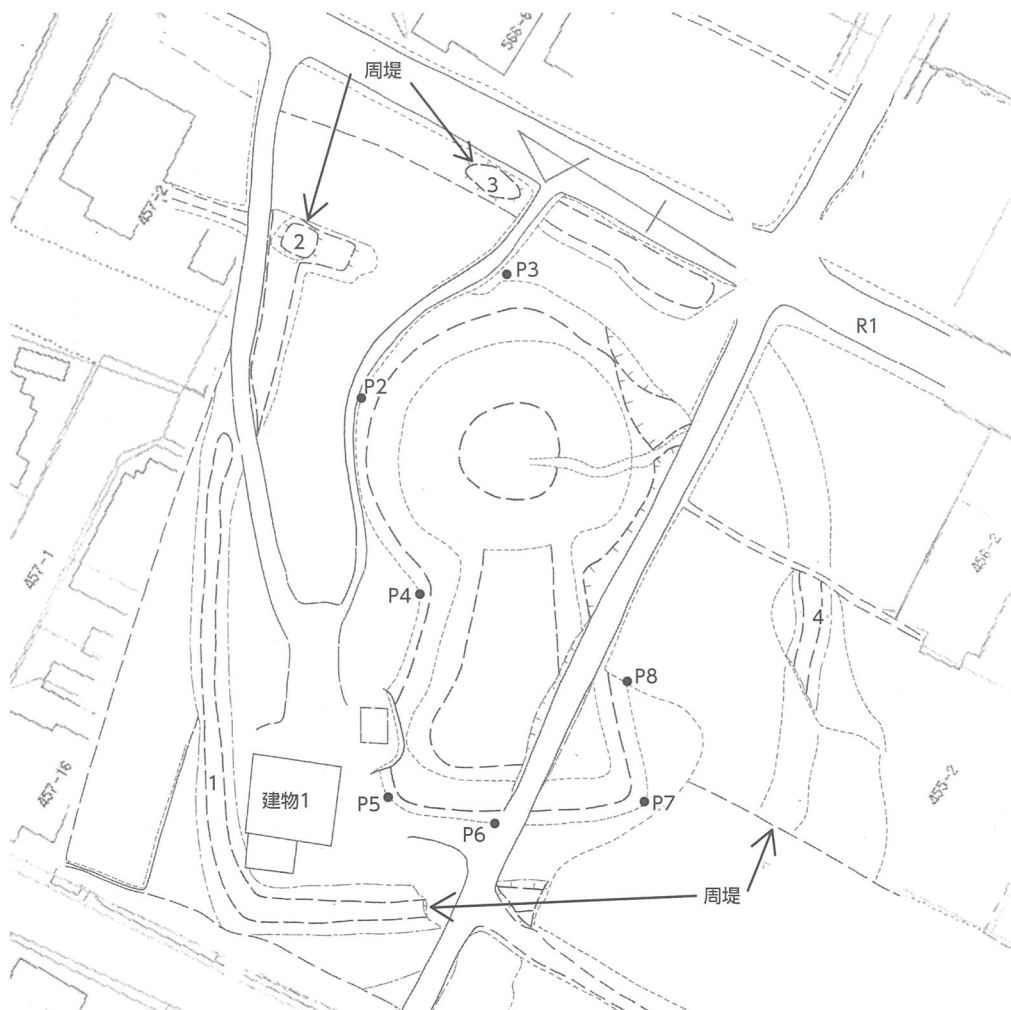
この写真で確認できる土地境界を現在の地籍図と照合してその規模を推定してみると、周堤を含めた墓域全長60.5m、幅52m、墳丘全長43m、後円部径25m、前方部長17.5m、クビレ部幅15m、前方端部幅25mの概数値が得られた。

③古墳の築造時期

柳田康雄氏は、先山古墳が破壊された跡地に巨石が置かれていたことを記憶している（註⑬）。巨石を用いた埋葬施設であれば古墳時代後期、とりわけ6世紀中葉以後に築造された横穴式石室である可能性が高い。また、馬蹄形の周堤をめぐる当該地方の前方後円墳としては、今宿大塚古墳や東二塚古墳があり、これらも6世紀代に築造された前方後円墳である。

また、「地名表」では古墳を後期と推定した根拠として須恵器の採集を挙げている。

博物館には大神邦博が採集した「先山」の注記がされた須恵器がある（註⑭）。胴部に回転搔目が施され、口縁端部が丸く肥厚している特徴はTK10型式以後に相当し、上記の古墳推定時期とも大きな齟齬はない。



第7図 先山塚古墳略図 (1/600)

(6) 高上大塚古墳

①航空写真に遺された高上大塚古墳

曾根丘陵の南奥、標高70mほどの高所を撮影した写真の中に円墳状の叢林がみえる。周辺の土地区画から割り出した叢林の直径は概算で30mほどになり、狐塚古墳の墳丘径に近い数値となった。

この地点を、前原町文化財地図（第2図）と照らし合わせると、ちょうどこの地点に前方部を西に向けた前方後円墳の表示があり、高上大塚古墳とされている。ちなみに古墳周辺の小字名は「大塚」であるが、大字は「井原」で、高上地区には「大塚」の地名はみられない（写真8）。

付近には他に古墳の表示がなく、仮りに円墳だったとすれば、畑地の中に独立して残る30m超の大型円墳を分布調査で見落とすとは考えられず、この円丘が高上大塚古墳の後円部と考えてい

いだろう。

円丘の左（西）側（写真9左上）には前方部の



写真9 高上大塚古墳（上から・1965年撮影）

残丘とみられる小さな突出部がみられ、分布図上の東西方向に主軸を向けた前方後円墳の表示とも符合する。1915（大正4）年に作製された地籍図（第11図左）には、円丘から西に長さ15mほどの前方部状の張り出し区画が認められた。これが前方部の一部とすれば、全長40mを超える前方後円墳であったことになる。



写真8 高上地区周辺の地形（真上から・1965年撮影）

②高上古墳出土の鹿角刀装具

高上大塚古墳からの出土品と確定できる資料は残っていないが、関西大学博物館に同墳出土の可能性が高い資料が所蔵されており（註⑮、⑯、⑰、⑱）、これまでもたびたび紹介されてきた。雷山村（高上）から出土したとされる2点の鹿角刀装具（MY-K2142（註⑲、⑳））である。

この資料は、大阪毎日新聞社の第五代社長の本山彦一が収集した「本山コレクション」のひとつで、入手経緯や出土状況などの情報については、『本山考古室要録』（以下『要録』）と『近江国高島郡水尾村の古墳』所収の「日本発見刀剣鹿角装具集成」（以下「集成」）の2書の記載が参考になる。

『本山考古室要録』抜粋

諸刃太刀 腐蝕

1. 「明治39（1906）年六月二日福岡県糸嶋郡雷山村字高上山上古墳発掘 鏢 鹿角 福岡市江藤正澄 蔵（本山）松陰○ 蔵ニ帰ス」

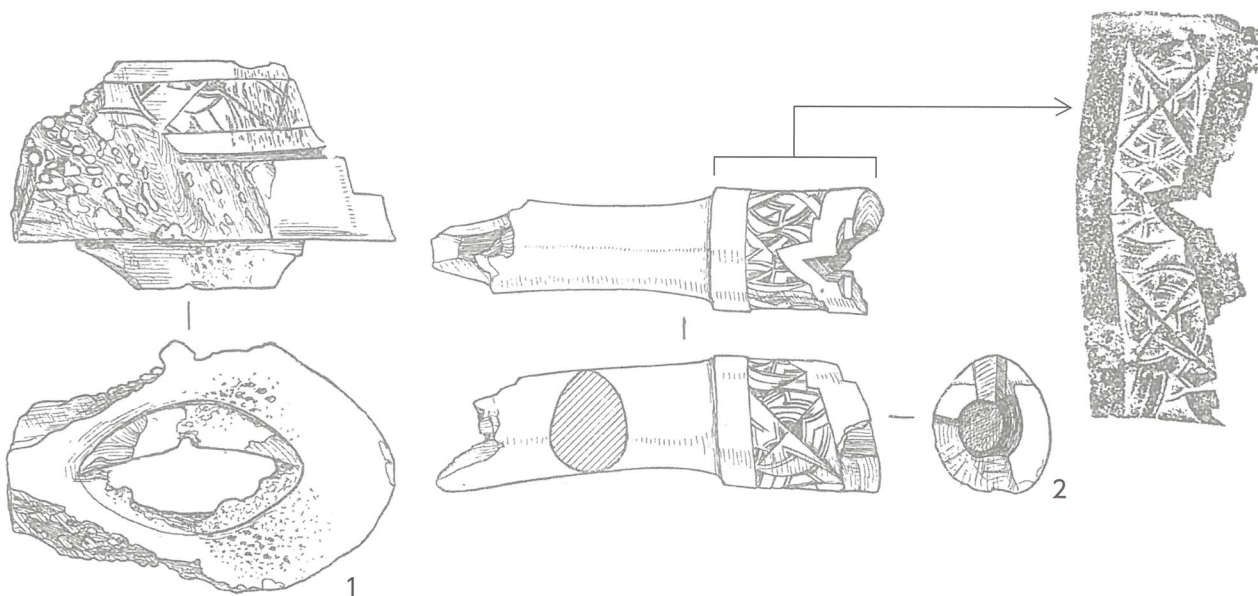
2. 「福岡県糸嶋郡雷山村山ノ奥にて所得 小刀柄 鹿骨 左之図 江藤正澄蔵（本山）松陰へ帰ス」

「日本発見刀剣鹿角装具集成」（『近江国高島郡水尾村の古墳』所収 抜粋）

遺跡 圓塚、石室

搬出遺物 刀身3 剣身5 鉄鏃23

漆塗冠帽残欵1



第8図 本山考古室要録所収の高上出土鹿角刀装具（2/3・文献⑮より転載・一部加筆）

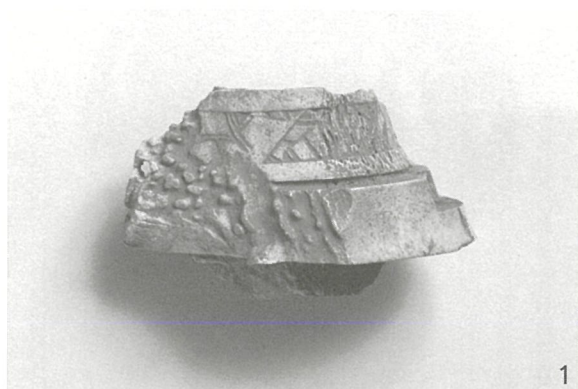
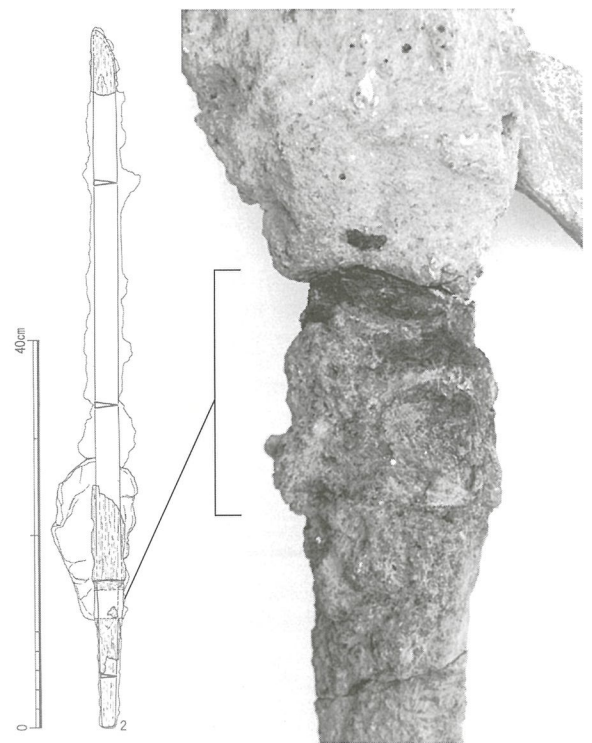
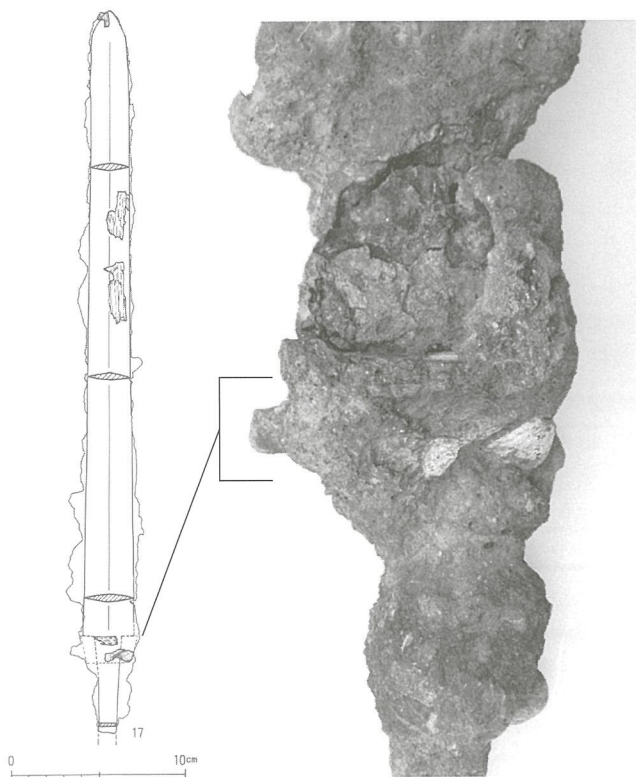


写真9 高上出土鹿角刀装具（1987年撮影）



第9図 西堂四反田古墳出土鉄大刀（左）と井原南田古墳出土鹿角装鉄剣（右）

発掘者である江藤正澄は、幕末から明治期に活躍した福岡県の国学者で、考古資料の収集家としても知られている。明治44（1911）年が没年であるので、この刀装具の発掘が江藤の晩年に行われたことがわかる。

高上地区は、曾根丘陵の南西基部、雷山川を見下ろす台地上に位置する一塊の小集落である。前掲文献の中では、高上古墳と集落との位置関係は明らかではないが、高上大塚古墳が高上集落の北東500mの山手に位置し、集落より15mほど高い集落を見下ろせる高所にあるので、『要録』に記された「山上」、「山ノ奥」という立地の記載内容にも符合する。また、高上大塚古墳の所在地は「井原」であるが、井原地区の本集落は、遠く、外来者から見ると、あたかも高上集落地内に所在する古墳と誤認されやすい場所である。集落はその南側にも山間部を抱えていて、こちらにも後期古墳が確認されているが、いずれも6世紀後半以後の古墳で、鹿角刀装具副葬の隆盛期から少し下るので、立地の候補からは外してよい。

古墳の墳形が円墳と記されていたのは、発掘時点ですでに前方部が大きく損壊し、写真のように円墳状を呈していたか、あるいは前方部が当地に

特有な低平であったために前方後円墳と認識できなかった可能性も考えられる。

主体部について詳細は記されていないが、当該資料がほとんど土汚れがみられないのに水銀朱の付着が顕著であること、有機質の資料であるにもかかわらず腐朽・腐蝕などによる劣化損傷が少ないことから、発見された遺構は盗掘を免れて良好に残存していた石棺ないしは石室であったことが



写真10 雷山出土双龍環頭大刀の柄頭部（ほぼ原寸）



第10図 曾根古墳群周辺の現況と古墳の配置 (1/4000 平成16年2月)

うかがえる。報告文には漆が付着した製品も残存していることが記録されているのも、このような出土環境によるものであろう。

2点の装具の記載内容の詳細には異なる点もあるが、「集成」ではいずれも高上古墳の出土としていることから、当初から同一の古墳（高上大塚古墳）からの出土品と考えられていたようだ。

なお、「集成」にみられる漆塗冠帽残欠について、鉄鏃がまとまって出土していることを考慮すれば有機材を用いた盛矢具を誤認した可能性も考えられる。

さて、第8図に示した装具1は、鉄剣の柄縁で、長さ4.5cm、幅7.6cm、厚さ5.0cm。側面観は台形で、柄元に直弧文がめぐる。柄と直交して装着される柄縁装具は別作りとなっていて、連結部は装具と装着するために平滑に切断され、中央に楕円形の装着孔が穿たれている。

刀装具2は、小刀の柄とされるもので、残存長8.85cm、幅2.05cm～2.6cm、厚さ1.65cm～2.4cmを測る。柄間と段を有する柄頭が一体的に造り出されていて、柄頭部には直弧文がめぐる。

これら鹿角刀装具の盛行時期は、5世紀後半と考えられているので、高上大塚古墳の時期も概ねこの時期に相当すると考えられる。

なお、糸島地方で鹿角刀装具が確認されている古墳としては、他に西堂四反田1号墳（大刀）と井原南田古墳（剣）がある。いずれの資料も保存状態が悪いので詳細はわからないが、双方とも高上大塚古墳に近い怡土平野南部に所在する、横穴式石室を主体部とした5世紀中～後半の円墳である。副葬品として、鉄刀、鉄剣、鉄鏃など武器が副葬されているなど共通点が多く、被葬者に対し、武力に秀でた首長層のイメージをいさぐ。

鴨稲荷山古墳の報告書にはもう一つ気になる資料集成が掲載されている。「日本発見刀剣環頭集成表」で、このなかに雷山（村）から出土した双龍環頭大刀の柄頭が掲載されている（写真10）。口を小さく開き玉を噛む二匹の龍が背中合わせで環頭内に配された意匠は、同種の大刀には珍しく、6世紀前半に舶載されたものと推定されている。出土した古墳の詳しい情報がなく、現在は資料の所在も不明であるが、高上大塚古墳に近在する当該地域の首長墓と考えられ、今後とも注意が必要であらう。

4. おわりに

昭和40年3月頃に撮影された曾根丘陵の古墳群の航空写真の観察を通して、当該地域の古墳の調査成果の検証と、墳丘が消失した先山古墳、高上大塚古墳の検討を試みた。

これまでの成果をもとに曾根丘陵上における古墳の築造順序を整理すると、狐塚（5世紀前葉）→銭瓶塚（5世紀後半）→ワレ塚（6世紀初頭）→先山（6世紀後半）の順に築造されたものと推定される。これに怡土平野の基地の首長墳である三雲端山、築山古墳、さらに後続する西堂古賀崎古墳なども加えると、4世紀から6世紀にかけての当該地域の首長墓の築造の流れを概ね復元することができる。

立地環境でみると、曾根丘陵は怡土平野の中央部に位置していることが重要である。この丘陵の中央部に築造された古墳の被葬者達は、旧怡土郡東部の瑞梅寺川と雷山川の両水系の平野に影響力を有した首長であったものと考えられる。

狐塚～ワレ塚古墳には葺石が施され、銭瓶塚、ワレ塚古墳では墳丘上に形象埴輪を含めた埴輪の樹立が認められるなど、規模はさほど大きくはないが、地域首長の古墳としての条件を備えているといえる。

なお、高上大塚古墳は概ね5世紀後半に築造された横穴式石室を主体部とする前方後円墳と考えられる。ただし、曾根丘陵上の他の首長墳とは地理的に離れ、雷山川流域への眺望を強く意識した選地がうかがわれることから、曾根古墳群グループとは異なる雷山川水系に依拠した首長墳であったと考えたほうがよいかもしれない。

なお、高上大塚古墳の所在地は大字井原に属することが判明したが、これまでの周知状況を勘案し、従来どおりの呼称を使用してしかるべきと考える。

【註】

- ①1793 加藤一純、鷹取周成〔共編〕『筑前国續風土記附録』
- ②1952 『福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究』福岡県教育委員会
- ③1974 『前原町文化財地名表』前原町教育委員会
- ④1963 日高光子 水崎しのぶ「曽根原2号墳出土円筒埴輪」糸高文林12 糸島高校
- ⑤1982 柳田康雄『三雲遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第62集 福岡県教育委員会
- ⑥1984 鍋島さとみ『曽根遺跡群Ⅲ』前原町文化財調査報告書第14集 前原町教育委員会
- ⑦1988 林覚『曽根遺跡群Ⅳ』前原町文化財調査報告書第27集 前原町教育委員会
- ⑧1982 林覚『曽根遺跡群』前原町文化財調査報告書第7集 前原町教育委員会
- ⑨2004 牟田華代子『銭瓶塚古墳』前原市文化財調査報告書第87集 前原市教育委員会
- ⑩1950 『糸高文林』創刊号 表紙裏図版として復元された家形埴輪の写真が掲載されている。
- ⑪2006 瓜生秀文『ワレ塚古墳』前原市文化財調査報告書第88集 前原市教育委員会
- ⑫2006 太田博之「前方後円墳出土の埴輪と木製品」『世界遺産の世界』21号 国際興業株式会社文化事業部
- ⑬柳田康雄氏から御教示いただいた。
- ⑭1991 岡部裕俊『平原周辺遺跡(2)』前原町文化財調査報告書第36集 前原町教育委員会
- ⑮1935 末永雅雄編『富民協会農業博物館本山考古室要録』岡書院
- ⑯1923 浜田耕作 梅原末治『近江国高島郡水尾村の古墳』京都帝国大学考古学研究報告第8冊 京都帝国大学
- ⑰1973 『考古学資料図鑑』関西大学
- ⑱1987 前原町教育委員会『伊都歴史資料館』
- ⑲2004 『関西大学博物館の名品』関西大学博物館
- ⑳2010 『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』関西大学博物館



第11図 高上大塚古墳周辺地籍図（左：1915年調製図を一部改変）と
現況図（右：2013年調整図に地籍図から推定した古墳の位置を表示したもの）



1.平原遺跡発掘調査風景俯瞰（東上空から）



2.平原遺跡発掘調査風景近景（南西上空から）



3.平原遺跡発掘調査風景全景（直上から）

写真11 平原遺跡発掘調査風景（1965年撮影）